



Title	北海道大学附属図書館報「榆蔭」
Citation	, 134, 1-36
Issue Date	2010-03-19
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/66251
Type	periodical
File Information	yuin134.pdf



[Instructions for use](#)



榊

Yuin

北海道大学附属図書館報

目次

平成8年の電子図書館構想 学術システム課 杉田 茂樹…………… 1	海外出張報告 ・欧州のオープンアクセスの現在—ベルギー, オランダ出張報告 学術システム課 杉田 茂樹… 18 ・ドイツ・スタディーツアー報告 利用支援課 磯本 善男…21 ・英国及び中国の大学間協定校を訪問して 管理課 菊池 満史, 長嶋 岳生…24
お知らせ ・来館日誌(平成21年10月～平成22年2月)… 6 ・国際会議「オープンアクセスリポジトリの現在と未来」を開催…………… 7 ・国立大学図書館協会北海道地区協会セミナー(第1回)を開催…………… 8 ・第6回DRFワークショップを開催…………… 9 ・e-Book(電子書籍)を購入しました…………… 10 ・新しくデータベースを導入します…………… 10 ・企画展示「北大生の学生群像」開催中…………… 12 ・附属図書館の所蔵資料がテレビ番組で紹介されました… 14 ・HUSCAPの収録文献数が3万編を突破…………… 16 ・AED講習会を開催…………… 17	資料紹介 平成21年度特別図書購入費による購入資料(2) 29 教員著作寄贈図書……………30 学術成果コレクション(HUSCAP)収録文献 (平成21年10月1日～平成22年1月31日)……………31 会議(平成21年11月1日～平成22年2月12日)…32 人事往来(平成21年11月1日～平成22年2月28日)32 図書館情報入門・セミナー等開講日誌 (平成21年10月1日～平成22年2月10日)……………33 図書館日誌(平成21年10月17日～平成22年2月12日)…35

平成8年の電子図書館構想

学術システム課 杉田 茂樹

1. はじめに

平成8年に描かれた図がある(図1)。

「北海道大学電子図書館システム」概算要求の説明資料の挿図である。

学術審議会による答申『今後における学術情報システムの在り方について』(昭和55年)をきっかけとして推進された国立大学図書館の業務電算化がおおむね完了しようとしていた。国立大学図書館協議会は、平成6年の専門委員会報告書¹⁾において、情報資源へのアクセスの保証と情報入手の可能性の増大を今後の課題と

して挙げ、来るべき大学図書館像を「単なる情報流通点ではなく、データベースを作成し、情報の媒介者となること」と表現した。

こうした背景のもとに「北海道大学電子図書館システム」は企てられ、しかし計画のみに終わった。それから約10年の時を経て、平成18年4月に「北海道大学学術成果コレクション(HUSCAP)」が稼動する。本稿では、平成8年の電子図書館計画(以下、「計画」という。)から現在に至る附属図書館の取り組みを、その背景となった情報環境の変化に触れながら回顧してみたい。

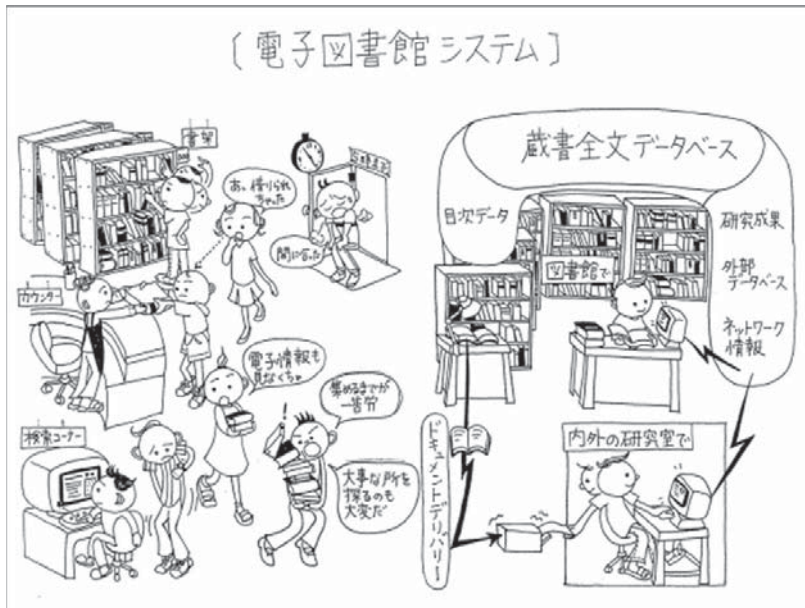


図1. 「北海道大学電子図書館システム」

2. 北海道大学電子図書館システム

平成8年というのは、学術審議会による建議『大学図書館における電子図書館機能の充実・強化について²⁾』に基づいて、国立5大学による『先導的電子図書館プロジェクト』が進められた時期である。

建議では「電子図書館」を“電子的情報資料を収集・作成・整理・保存し、ネットワークを介して提供するとともに、外部の情報資源へのアクセスを可能とする機能をもつもの”と定義している。

「北海道大学電子図書館システム」は、そのコンセプトを6つのキーワード群によって表現している。長くなるが、以下に原文のまま引用する。

(1) 総合電子図書館／情報発信図書館

北海道大学は大規模総合大学であり、その蔵書は全ての分野におよび研究図書を中心に学習図書・参考図書など310万冊(件)を備えている。これらの内、著作権に触れないもの(約50万書誌)の全文データベース化及び全蔵書の目次情報のデータベース化を図る。また、本学が創出した研究成果である紀要・学位論文等(1,600冊/年)の全文データベース化を図る。

加えて、最新で最先端の外部学術情報データベースを導入し提供する(学内)。

(2) 貴重資料電子図書館／クラーク電子図書館

附属図書館には、北海道はもとより環日本海地域・スラブ圏・北太平洋沿岸地域を含む北方圏資料、全国共同利用を目的に収集した各種大型コレクション、新渡戸稲造文庫や内村鑑三文庫などの各種文庫がある。これら資料のマルチメディア・データベース化を図る。このことにより貴重資料の保存機能も果たすことができる(長年懸案とされてきた問題)。

(3) マルチメディア図書館

附属図書館北方資料室には、画像(写真・古地図・外交書簡等)、音声(アイヌ民謡等)、映像(自然ビデオ等)など多様な媒体での貴重資料が多数存在する。これら資料のマルチメディア・データベース化を図る。

(4) 先端DB図書館

学術研究活動は、世界的な即時性を持って展開されている。この支援のため、学内での需要性が高く、最新・最先端で多様な外部学術情報データベース(一次情報、二次情報のCD-ROM等)。

INSPEC:工学系, PAIS:国際政治経済系, CAonCD:化学系, ERIC:教育系など)を導入し, 学内に24時間提供する。

(5) インターネット図書館/オンデマンド
図書館/24時間図書館

電子図書館サービスは学内ばかりでなく, インターネットを介して国内外に24時間提供する。利用者は研究室等の端末からオンデマンドで, ドキュメント・デリバリーを含む図書館サービスの全てを享受することができる。

(6) 全国共同サーバ図書館

北大電子図書館システムは, 全国にサービスを提供する共同利用サーバ機能を果たす。更に, 他大学図書館等が保有する北方圏関係資料等を北大電子図書館システムを利用して提供することも可能にする。

全方位型の, 意気に満ちた計画である。ウェブの開発が急速に進んだ時期でもあった。目の前には開拓すべきフロンティアが広がっていた。

3. 続く10年間に起きた主なできごと

このときの概算要求は残念ながら不調に終わり, この巨大な計画はお蔵入りとなった。それから, 情報技術の進展やインターネット利用の普及に伴う社会的変化が附属図書館に押し寄せる。「電子図書館」の語から想起されるさまざまなアイディアは, あるものは商用サービスとして成立し, あるものは技術の進歩により乗り越えられた。

(1) 巨大な電子コンテンツの現出

計画には, 50万冊の全文電子化があった。

著作権の消滅した文芸作品のテキストをインターネット上で公開する「プロジェクト・グーテンベルク³⁾」は本稿の守備範囲をはるかにさかのぼる1971年から活動をしていた。国内で

「青空文庫⁴⁾」がスタートしたのは1997年。現在, 前者は約3万点, 後者は約9千点の全文テキストを公開中である。オープンな百科事典ウィキペディアの姉妹プロジェクトであるウィキソース⁵⁾では, 公文書をはじめとした約3千点の文書が閲覧可能となっている。

こうしたオープンなテキスト共有の流れに加え, 昨今では, 図書館蔵書の全文デジタル化は単館レベルの事業を超え, Google Book Search⁶⁾やOpen Content Allianceによるグローバルな展開に転じた。平成17年にサービスインしたOpen Content Allianceのウェブサイト「Open Library」⁷⁾では約2,400万冊の図書の情報を検索可能であり, うち約116万冊は全文をオンラインで読めるまでになっている。

一方, 商用面においては書籍のデジタル化は音楽コンテンツなどと比べると大きく遅れをとっていた。しかし, 電子書籍リーダの発達による大きな進展のただ中に現在あることは承知の通りである。

(2) 電子ジャーナルの成立

大学図書館にとってそれ以上に大きな状況変化となったのは, 学術雑誌の電子化である。

計画の「先端DB図書館」の中で, 「最新・最先端で多様な外部学術情報データベース」として触れられた“一次情報”の4文字がいわば電子ジャーナルに相当する。

2000年前後には主要な国際ジャーナルはほぼすべて電子版を備えた。20世紀後半の科学の深化と多様化の中で学術出版市場そのものも巨大化してきていたが, ちょうど時期を同じくして, 大手学術出版の統廃合が進んだ。現在, 電子媒体のジャーナルは, タイトル単位の取捨選択でなく, 大規模プラットフォーム(「サイエンスダイレクト」など)を基盤とした一括購読の形態が主流になっている。

計画中「オンデマンド図書館」の一環として構想されたドキュメントデリバリーサービスは,

学術雑誌がオンラインでいつでも閲覧可能となることでその狙いの多くの部分を失した。

(3) ユビキタス環境

「オンデマンド図書館」の売りのひとつは、学外からの情報アクセスであった。ダイアルアップによるHINESへの接続の時代に比し、現在ではネットワーク環境はその速度もバリエーションも格段に進歩している。

モバイル機器や出張先のコンピュータ環境から学術情報へアクセスする手段も発達を遂げた。附属図書館が昨年来試行運用を行ってきたリモートアクセスサービスでは、電子ジャーナルや文献情報データベースを含む、まさにさまざまな図書館サービスに遠隔地からアクセスできるようになっている。

さらに、欧米を中心として普及の進んでいる、シボレス⁸⁾と呼ばれる遠隔認証技術により、図書館サービスを経ずして学術情報資源にアクセスできる世界が到来しようとしているところである。

(4) オープンアクセス思潮の誕生

電子ジャーナルの項で述べた学術出版市場の巨大化は、経済的要因による研究機関間の情報格差を生み出した。学習・研究活動のライフラインである電子ジャーナルを、本学は相当の全学共通経費によって支えている。しかし大学の予算規模によっては十分なジャーナルの確保が困難となるケースがあることは想像に難くない。

経済的理由による購読キャンセルの多発は、総体としては研究論文の流通不全を意味する。読者としての研究者にとってこれはもちろん死活問題であると同時に、著者としての研究者にとっても、本来望みうる十分な読者に自著論文を届けられないという困った事態となる。

これに対し、無料学術誌の創出や、著者自身による自著論文のウェブ公開によって学術情報

の流通を補完しようとする動きが起こった。オープンアクセス運動である。

計画では、「情報発信図書館」の一角として、紀要と学位論文の電子化・発信が構想されていた。オープンアクセスはその先に行く。2004年、業界最大手のエルゼビア社は、同社刊行誌掲載論文の原稿ファイルを独自にウェブ公開することを著者に認めた。商業誌掲載論文についても、著者の意志で独自に公開する道がひらけたのである。

そのためのプラットフォームとして、機関リポジトリの概念が生まれた。ネットワーク情報連盟(CNI)のクリフォード・リンチは、機関リポジトリを「大学とその構成員が創造したデジタル資料の管理や発信を行うために、大学がそのコミュニティの構成員に提供する一連のサービス」(2003)と定義している。

(5) 骨董指向の終焉

1990年代に全国各地で電子図書館として試みられたのは、図書館所蔵貴重資料(古書、古地図、古写真など)のデジタル化であった。平成14年に科学技術・学術審議会下の作業部会がまとめた『学術情報の流通基盤の充実について(審議のまとめ)⁹⁾』の「大学図書館における電子図書館的機能の整備」の章には次のようである。

大学図書館は、大学等からの情報発信機能を充実させるため、学内で生産された学術情報の積極的な発信を行うほか、電子ジャーナル等の普及に対応したサービスの展開など、大学等からの情報発信機能の整備に関して、総合的な企画・立案を行う機能及び発信される情報のポータル機能を担うことが求められている。

建議に比べると、大学図書館への期待が研究成果の発信へと大きくシフトしていることがわかる。

このうち、同作業部会による『学術情報基盤の今後の在り方について（報告）¹⁰⁾』（平成18年）では、「大学全体の教育研究活動との直接的な連携に欠けたこと、電子化の対象資料が一部に偏ったこと」が従来の電子図書館の反省点とされ、「機関リポジトリの推進」が明に項目として立てられることになる。

4. 北海道大学学術成果コレクション

こうした10年間を経て、平成16年、附属図書館は、国立情報学研究所の主宰する『学術機関リポジトリ構築ソフトウェア実装実験プロジェクト』に参加した。同年10月に、同プロジェクトの招聘により来日したオープンアクセス活動家スティーブン・ハーナッドは、「研究者は知見を広めたい。著作権はクリアされている。あとは図書館が実行するだけだ」と述べた。

プロジェクト参加の成果として、本学機関リポジトリが、平成17年3月に「北大学術リポジトリ（実験版）」の名で試験稼動した。

現在のHUSCAPである。

前章に述べた通り、平成8年に構想された「北海道大学電子図書館システム」のスコープは10年にわたって、いわば波に洗われるように削られたり、変形したりしてきた。それは彫琢の過程であったということができるかもしれない。そして、“本学が創出した研究成果”の発信機能こそが現代の大学における電子図書館——これがその結論である。

さらに5年を経た平成22年現在、HUSCAPには3万を超える文献が収録され、ダウンロード数は総計360万を数える（図2）。

北海道大学構成員が生み出したもの、それは、北海道大学にとって、出版流通品よりもはるかに貴い。HUSCAPに収録された電子ファイルを、附属図書館は蔵書コレクションの最重要の一角として大切に後世に継承していかねばならない。「北海道大学ライブラリー」の新たな意味がそこに生まれるのではないだろうか。

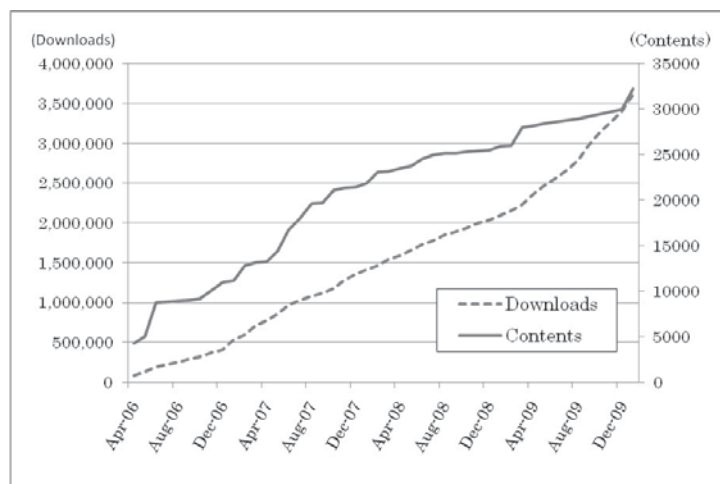


図2. HUSCAPの収録文献数とダウンロード数の推移

1) <http://www.libra.titech.ac.jp/next/ichiji/section1.html>

2) <http://www.soc.nii.ac.jp/anul/j/documents/mext/kengi.html>

3) http://www.gutenberg.org/wiki/Main_Page

4) <http://www.aozora.gr.jp/>

5) <http://ja.wikisource.org/>

6) <http://books.google.co.jp/>

7) <http://openlibrary.org/>

8) <http://shibboleth.internet2.edu/>

9) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu2/toushin/020401.htm

10) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/06041015.htm

お知らせ

来館日誌

(平成21年10月～平成22年2月)

No.	来館者	来館日	時間	人数	備考
1	札幌大学学生	11月4日(水)	13:30-14:30	20	北方資料室見学
2	菅野外務省外交史料館事務官	11月18日(水)	14:00-17:00	1	図書館, 北方資料室見学
3	羽鳥文部科学省専門官ほか	12月4日(金)	10:10-10:50	2	図書館見学
4	(大韓民国)慶北大学校法科大学訪問団	1月27日(水)	13:30-13:45	7	図書館見学
5	山崎文部科学省整備計画室長	1月29日(金)	17:50-18:00	1	図書館見学
6	(大韓民国)江原大学訪問団	2月2日(火)	14:30-15:00	7	図書館見学
	計			38	



江原大学訪問団の皆様

国際会議「オープンアクセスリポジトリの現在と未来」を開催

附属図書館が代表をつとめる「デジタルリポジトリ連合 (Digital Repository Federation : DRF)」は、平成21年12月3日(木)～4日(金)の両日にわたり、東京工業大学蔵前会館を会場として、国際会議「オープンアクセスリポジトリの現在と未来：世界とアジアの視点から (デジタルリポジトリ連合国際会議2009)」を開催しました。機関リポジトリを中心としたオープンな学術情報流通をテーマとし、8カ国・地域から174名の研究者、図書館職員等の参加がありました。

国際的連携をテーマとしたセッションでは、サルバトレ・メレ氏 (欧州合同素粒子原子核研究機構)、アリシア・メディナ・ロペス氏 (オープンアクセスリポジトリ連合)、デイヴィッド・シュレンバーガー氏 (米国公立大学協会) から、(1) 学術研究コミュニティ主導による専門学術誌出版、(2) 研究論文、研究データ等の組織的共有化を基盤としたインターネット活用型研究環境の整備、(3) 研究論文の全面的オープンアクセス化のための制度構築についての話題提供があり活発な議論が行われました。また、アジア太平洋地域のオープンアクセスをテーマとしたセッションにおいて豪州、台湾及び日本の代表者による各国・地域の現況報告がなされたほか、米国、英国、香港から先進的な機関リポジトリ構築や関連の諸活動を行っている大学の事例報告がありました。同会議の詳細については下記URLをご覧ください。

<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?DRFIC2009>



逸見勝亮附属図書館長による開会あいさつ (写真左) と会場の様子 (写真右)



講演者一同

(学術システム課)

国立大学図書館協会北海道地区協会セミナー（第1回）を開催

平成22年2月4日（木）、5日（金）の2日間にわたって、附属図書館大会議室において、国立大学図書館協会北海道地区協会セミナー「次世代ライブラリアンシップのための基礎知識（第1回）」が開催され、学内外から87名の参加がありました。

このセミナーは、国立大学図書館協会地区協会助成事業として開催されたもので、1日目は、「電子ジャーナル契約の諸相」（講師：東京大学附属図書館情報管理課長尾城孝一氏）と「最新認証技術による電子ジャーナル利用」（講師：国立情報学研究所学術基盤推進部学術コンテンツ課阿菺品治夫氏）の2つの講演の後、北海道内の6つの国立大学図書館から、事例報告がありました。

2日目は、本学観光学高等研究センター准教授山村高淑氏による「地域側・研究者側からみた機関リポジトリ活用のニーズと可能性」と題した講演の後、逸見館長をコーディネーターとして講師3氏によるパネルディスカッション「より良い学生サービスを目指して～求められる図書館職員の資質」が行われました。氾濫する電子化された情報を学習に利用する方法について、図書館と教員が連携してどのように学生を教育していくか等、熱心な意見交換が行われました。

なお、講師3氏の当日配布資料は、下記URLをご覧ください。

<http://janul-hokkaido.lib.hokudai.ac.jp/>



尾城孝一氏の講演



阿菺品治夫氏の講演



山村高淑氏の講演



パネルディスカッションの様相

(管理課)

第6回DRFワークショップを開催

平成22年2月5日（金）附属図書館大会議室において、第6回DRFワークショップが開催され、道内外の大学、研究機関、企業から90名の方々の参加がありました。

DRFは大学、研究機関における、機関リポジトリを通じた学術成果の蓄積と内外への発信のための情報共有を促進し、これを後援することを目的とした組織で、111の大学、研究機関が参加しています（平成22年2月8日現在）。

ワークショップは二つのセッションに分かれて行われ、まずセッション1「これまでの5年間」では、DRF参加機関からの事例報告およびこれから取り組むべき課題について発表があり、大学図書館と学会出版との関係の在り方、地域共同リポジトリの構築、図書館という存在のアカウンタビリティを今後どのように果たして行くのか等、様々な角度からの話題提供や問題提起がされました。

続いてセッション2では、「これからの5年間」と題してパネルディスカッションが行われ、今後の機関リポジトリおよびDRFの展望について活発な議論が交わされました。

特に各機関の研究成果について機関リポジトリへ登録することを義務化すべきか、国際化にはどのように対応するのか、現状の図書館の事務組織体系にリポジトリ業務をどう取り込んでいくのかという3つの論点をめぐって、今後予想される課題や可能性について意見が交わされ、非常に内容の濃いパネルディスカッションとなりました。



パネルディスカッションの様子

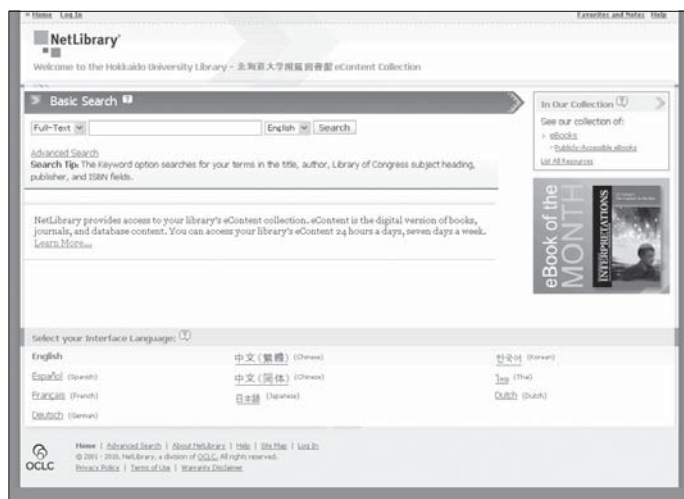
(管理課)

e-Book (電子書籍) を購入しました

Web上で閲覧できるe-Book(電子書籍)を購入しました。約3,500点のe-Bookが北大蔵書検索から利用できます。また「NetLibrary」(ネット・ライブラリー)からも利用できます。

例えばこんな本が読めます。

- Basic & Clinical Pharmacology / edited by Bertram G. Katzung (11th ed.)
- Structure Determination of Organic Compounds: Tables of Spectral Data (4th rev. and enlarged ed.)
- Pythagoras' Revenge: A Mathematical Mystery / by Arturo Sangalli



特別な手続きは必要ありません。北大構内にあるどのコンピュータからでもご利用いただけます。ただし、一冊を同時に閲覧できるのは一人まで、また、印刷は一時間に10ページまでと制限されています。ご注意ください。

- ▶ アクセス先URL(NetLibrary)(※注):<http://www.lib.hokudai.ac.jp/modules/tinyd8/index.php?id=8>
(附属図書館ホームページ>学術文献データベース>電子ブック・電子ジャーナルの全文検索機能)

新しくデータベースを導入します

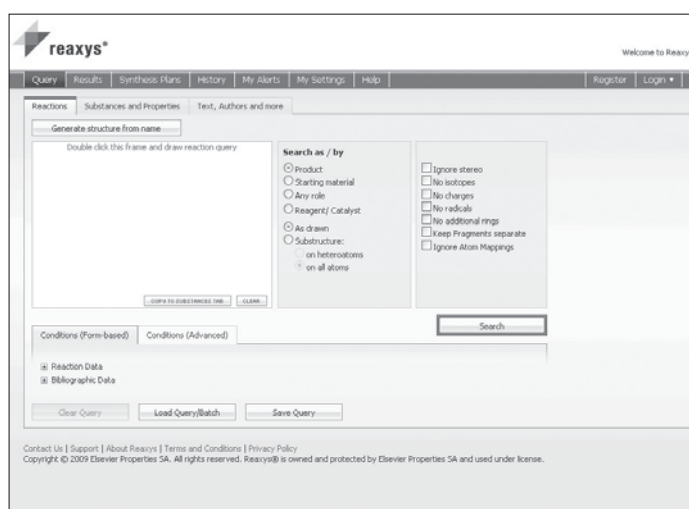
2010年4月1日(木)より「Reaxys」(リアクシス)と「日経BP記事検索サービス」を正式に導入します。

OReaxys (リアクシス)

三つのデータベース、

- CrossFire Beilstein
- CrossFire Gmelin
- Patent Chemistry Database

を情報源とするファクトデータベースです。抄録・索引だけでなく化学反応、合成法、毒性情報、薬学情報など多岐にわ



たる情報を検索できます。特許情報なども含み、文献情報へのリンクもあります。

同時アクセス数は無制限。リモートアクセスサービスにも対応していますので、出張先や自宅からご利用いただけます。

▶アクセス先URL(※注) : <http://www.lib.hokudai.ac.jp/modules/tinyd8/index.php?id=4>

(附属図書館ホームページ>学術文献データベース>自然科学・理工学分野)

○日経BP記事検索サービス(大学版)

日経BPグループから発行されている主要雑誌約50誌の記事検索と本文の閲覧・印刷ができます。

☆主な収録誌

- ・日経ビジネス ・日経Linux
- ・日経コンピュータ
- ・日経エレクトロニクス
- ・日経パソコン ・日経PC21
- ・日経Network
- ・日経アーキテクチャ
- ・日経サイエンス
- ・日経マネー
- ・日経メディカル 他

☆休刊、誌名変更前の雑誌バックナンバーも収録(例:日経バイト 他)

☆その他、「パソコンスキルアップ講座」「企業動向ウォッチ」など目的に応じて分類された便利なページもあります。

The screenshot displays the '日経BP記事検索サービス' (Nikkei BP Article Search Service) interface. The main content area features an article titled '「クラウド」の値段' (Cloud Prices) with a sub-headline '「クラウドコンピューティング」を前提とした製品が増えている。クラウドを利用すれば、「情報システムを自社で抱える必要がなく、コストも削減できる」と期待する経営層も多いが、本当に安いのだろうか。日経コンピュータ9月17日号では、代表的なクラウド型サービスであるSaaSの価格を徹底調査。本来は非公開の初期費用についても可能な限り情報入手を試みることで、クラウドの「実際のコスト」を探った。' Below this, there are several bullet points: '●グループウェア「月額500円」が標準に', '●営業支援 ― 初期のSI費用は1000万円', '●ERP/会計 ― 要件確定がシステムの完成', and '●人事/教育 ― 類案な法改正にも更新不要'. The page also includes a sidebar with '最新雑誌' (Latest Magazines) and '人気記事ランキング' (Popular Article Ranking).

*このサービスは年間利用可能数に上限があります。(26,400本まで)

(上限を超えた場合には追加料金がかかりますが、利用者に代金を請求することはありません。)

*本文の体裁には「テキスト」(=文字のみ、写真・図表なし)と「PDF」(=印刷の体裁と同じ)の二種類あります。同じ記事でも両方を閲覧すると「2本」見たことになります。

*日経BP社に使用権のない図表・写真等は表示されません。

▶アクセス先URL(※注) : <http://www.lib.hokudai.ac.jp/modules/tinyd8/index.php?id=8>

(附属図書館ホームページ>学術文献データベース>電子ブック・電子ジャーナルの全文検索機能)

※注意

附属図書館ホームページは平成22年4月にリニューアルを予定しています。

今回ご紹介したe-Book, データベースを4月以降にご利用の際は, お手数ですが, 附属図書館ホームページにて新しいアクセス先をご確認ください。

(利用支援課)

企画展示「北大生の学生群像」開催中

附属図書館正面玄関ロビーにおいて、附属図書館と大学文書館共催の企画展示「北大生の学生群像」を開催しています。

この展示は、北海道大学が1876年に札幌農学校として開学して以来、これまでの北大生の生活の様子を附属図書館と大学文書館が所蔵する資料と解説パネルで紹介するものです。教科書、受講ノート、修学旅行報告書、遊戯会記録など、その時代の学生たちの過ごし方が生き生きと伝わるように構成しています。

「北大生の学生群像」展は全4期の企画展示で、期間は1期ごとに3か月です。今年度はそのうち第1、2期を次のとおり開催しています。

第1期：『札幌農学校の学生生活（1）—札幌農学校で世界と出会うとき—』

期間：2009年11月16日～2010年2月15日

第2期：『札幌農学校の学生生活（2）—札幌農学校で世界が出会うとき—』

期間：2010年2月16日～2010年5月15日



展示風景（第2期）

主な展示資料の紹介

第1期 札幌農学校前・中期（1876～1900年，第1～18期生）

ケースNo	テーマ	資料名	所蔵
1	教室で西洋文化と 出会うとき	W. S. クラーク講義「植物生理学」（佐藤昌介受講ノート，1876）	大学文書館
		J. C. カッター『生理学』（1885）	附属図書館
		【写真】札幌農学校初期の外国人教師（1879）	附属図書館
2	放課後だって西洋流	寄宿舎の献立（1881）	大学文書館
		【写真】北西から見た札幌農学校校舎（1890頃）	附属図書館
		第4期生がブルックスに宛てた英文書翰	附属図書館
3	教室から飛び出して	高橋良直の「修学旅行願」（1893）	大学文書館
		第12期生の修学旅行報告書（1893）	大学文書館
		川上瀧彌「阿寒湖採藻記」（1898）	附属図書館
4	農学校を飛び立つ	平塚直治「亜麻立枯病研究報告」（1896）	附属図書館
		高岡熊雄のドイツ留学時の受講ノート（1903）	大学文書館
		谷井恭吉への清国山東省農桑顧問招聘関係文書（1903）	大学文書館

第2期 札幌農学校後期（1900～1907年，第19～24期生）

ケースNo	テーマ	資料名	所蔵
1	有島武郎がいた青春	有島武郎の「身体検査証」（1900）	大学文書館
		カーライル『サーター・レザータス（衣装哲学）』（1838）	附属図書館
		【写真】第19期生の集合写真（1900）	大学文書館
2	羽ばたく19期生	森本厚吉『文化生活』（1923）	附属図書館
		星野勇三『最新果樹栽培講義』上巻（1915）	附属図書館
		森廣・川上瀧彌『はな』（1902）	附属図書館
3	北のアゼンス，札幌へ	宮城源榮（沖縄県出身）の「入学願書」（1900）	大学文書館
		インド人留学生 バルタクルの「入学嘆願書」（1905）	大学文書館
		清国人留学生 周忠緯の「臨別贈言」（1902）	大学文書館
4	さらば，演武場の青春	第19回遊戯会競技出場者（1900）	附属図書館
		遠友夜学校第6回卒業記念（1904）	大学文書館
		【写真】新築直後の札幌農学校図書館（1903）	附属図書館

(北方資料室)

附属図書館の所蔵資料がテレビ番組で紹介されました

附属図書館北方資料室所蔵の古写真「建築中のロシア正教会堂（ニコライ堂）」（図1）、「建築中のニコライ教会堂屋上より見たる東京全市」（図2）が、NHKのテレビ番組「ブラタモリ」の神田特集（平成22年1月28日放送分）で紹介されました。

これらの写真は附属図書館本館4階の北方資料室でご覧いただける他、附属図書館ホームページ上の「北方資料データベース」からWeb上でご覧いただけます。

「北方資料データベース」では、附属図書館で所蔵している古写真、古地図、古文書類等を検索・閲覧することができます。

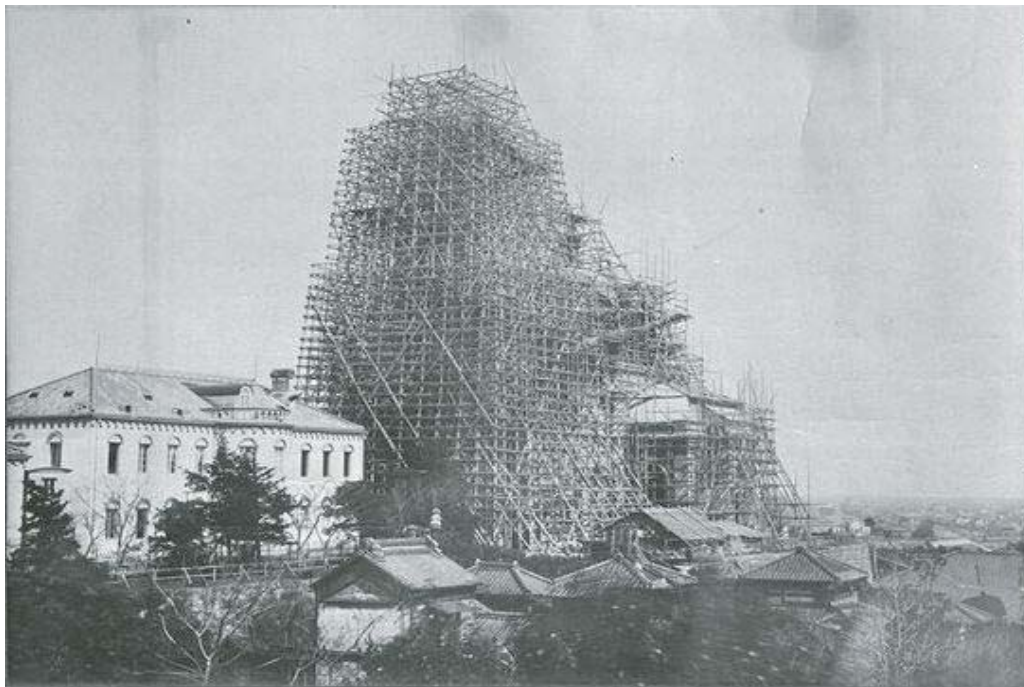


図1. 建築中のロシア正教会堂（ニコライ堂） [請求記号：軸物 40(1)]

(北方資料室)



図 2 : 建築中のニコライ教会堂屋上より見たる東京全市 [請求記号 : 軸物 40(2)]
※注 : 原本は13枚続きの軸物 (大きさ37.5×482cm)。上図AがA'に、BがB'にそれぞれ続いている。

HUSCAPの収録文献数が3万編を突破

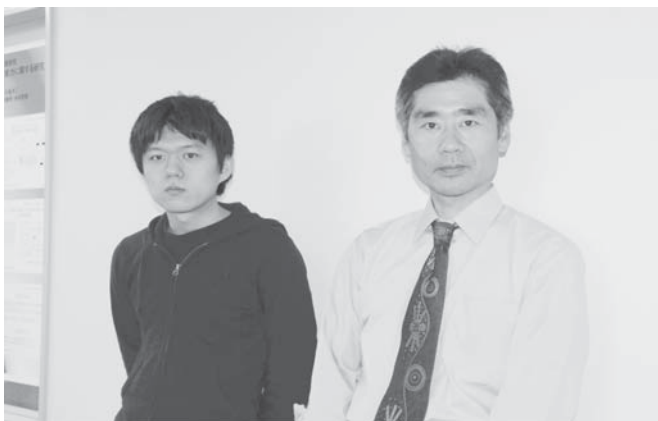
平成21年12月24日に、「北海道大学学術成果コレクション (HUSCAP)」の収録文献数が3万編に達しました。3万編目の文献は、工学研究科環境循環システム専攻博士課程の高田迪彦さんと藤井義明教授による以下の論文でした。

Michihiko Takada and Yoshiaki Fujii

An Experimental Study on Permeability of Kimachi Sandstone in Deformation and Failure Process under Deviator Stress.

Proceedings of the 3rd International Workshop and Conference on Earth

Resources Technology, 2009, pp. 124-131. (<http://hdl.handle.net/2115/40224>)



高田迪彦さん（左）と藤井義明教授（右）

高田さんから

「今回の論文は、岩石の室内実験に関するものです。岩石が圧縮されて壊れる過程で透水係数がどのように変化するかを調べました。HUSCAPに掲載された論文を、共通した分野の方などに役立てていただければ幸いです。」

藤井教授から

「岩盤の中の水の流れは、有害物質が流出するだけでなく、岩盤の安定性にも影響しますので、廃棄物の地層処分や各種地下構造物の設計に非常に重要な情報となります。高田君の研究は、一回壊れて水を通しやすくなった岩盤が、次第に元に戻る過程を研究したもので、この現象を応用すると廃棄物を安全に安く処分できる可能性があります。」

この論文については、高田君と似たような世界の若い研究者に読んでもらいたいですが、これに限らず、学際的な研究成果のリアルタイムな発信のためにHUSCAPを大いに利用させていただこうと思っています。」

いただいたコメントの全文は、HUSCAPのトピック（下記URL）をご覧ください。

<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/count/30000.jsp>

(学術システム課)

AED講習会を開催

平成22年1月25日に、附属図書館大会議室において、AED講習会が開催されました。

札幌北消防署から講師をお招きし、座学及び実技指導が行われました。

部局からも含めて30名近くの参加がありました。実際に使用される機会はないほうがよいのはもちろんですが、いざという時のために、参加者一同、真剣に実技に取り組みました。

なお、本館、北図書館にはそれぞれ1台ずつAEDが設置されています。設置場所は、本館は3階カウンター前、北図書館は2階カウンター前です。



座学の様子



熱心に説明を聞く参加者

(管理課)

海外出張報告

欧州のオープンアクセスの現在－ベルギー，オランダ出張報告

学術システム課 杉田 茂樹

(1) DRIVERサミット

平成21年10月20日， Gent 大学（ベルギー）で開催されたDRIVERサミットに出席しました。

DRIVERとは，EU第7次基本計画による助成に基づく「欧州における研究のためのデジタルリポジトリ基盤構想 (Digital Repository Infrastructure Vision for European Research)」プロジェクトの略称です。DRIVERサミットは，同年12月の活動期間終了を前に，同プロジェクトの活動を総括するもので，(1) プロジェクトメンバー機関が分担して行ってきたさまざまな研究開発テーマの成果報告，(2) 欧州各地のオープンアクセスリポジトリの現況報告，(3) 将来展望から構成される国際ミーティングでした。



複数の発表において，Enhanced Publicationという言葉が何度も聞かれたのが印象的でした。Enhanced Publicationとは，研究論文のみならず，実験結果，観測結果などを含む付随情報をもまとめてハンドリングすることを指します。Enhanced Publicationとセットで，VRE (Virtual Research Environment) というキーワードも頻出しました。研究活動の中で生み出さ

れるあらゆる中間生成物を最終成果物とともに，トータルにコンテンツとして扱い，必要に応じ共有できるよう，研究環境の中にオープンアクセスリポジトリを組み込んでいこうとの文脈です。本学の機関リポジトリHUSCAPは主として研究論文本体を収録対象としてきましたが，今後の方向性として考えていく必要があると感じました。

(2) COAR設立会議

DRIVERサミットの翌日、同一会場にてCOAR設立会議が行われました。

COARはオープンアクセスリポジトリ連合 (Confederation of Open Access Repositories) の略称で、この日、ヨーロッパ、アジア、北米の17カ国、28機関をメンバーとして発足したものです。初期段階の優先課題として、(1) 組織体制の確立、(2) コミュニティ形成、(3) 活動の普及、(4) 国際連携が挙げられ、さらに国際連携活動の柱として、(4-1) 永続識別子への対応、(4-2) 引用分析、(4-3) 学術出版との協働、(4-4) 要素技術における相互運用性の向上を当初の活動領域とすることとなりました。会議では、併せて理事会 (Executive Board) メンバーが選挙により選出されました。議長にはドイツのゲッチンゲン大学図書館長ノルベルト・ロッソウ氏、副議長には筆者、財務担当理事にはスペイン国立通信教育大学のアリシア・ロペス・メディナ氏が就任しました。

日本からは国立情報学研究所とデジタルリポジトリ連合が設立メンバーとしてCOARの参加機関となりました。デジタルリポジトリ連合は、機関リポジトリの運営のための担当者間情報共有を目的とした大学間連携組織で、本学が代表をつとめ、国内の87大学・研究機関 (当時) によって構成されています。



(3) ユトレヒト大学オープンアクセス週間シンポジウム

両会議後、ユトレヒト市 (オランダ) に移動し、オープンアクセス週間イベントとして10月23日にユトレヒト大学で開催されたシンポジウム「Read me, Cite me, Count me! symposium on publication strategy and research marketing for academics」に出席しました。



オープンアクセス週間とは、オープンアクセスの啓発を目的として世界的に定められたキャンペーン週間で、世界各地でさまざまなイベントが開催されました。

会場となったユトレヒト大学図書館会議室は100名を超える聴衆で満員、ほとんどが若手研究者でした。研究担当副学長による基調講演では、ユトレヒト大学のこれからの大学戦略及び研究評価方式の説明がありました。以降は、図書館司書及びシュプリンガー社講師によるオープンアクセス活動のレクチャーがあったほかは、すべて各分野のシニアの研究者の方々のトークでした。内容は、シンポジウムの全体テーマにあるとおり、電子情報流通環境下における研究生活、成果発表の形に焦点をあてたもので、全般に、経験を積んだ研究者からこれからの世代へのメッセージといった趣きの非常に立派な会でした。質疑も活発でした。

最後になりましたが、今回の出張にあたり快く送り出していただいた附属図書館の皆様から心から感謝します。



ドイツ・スタディーツアー 報告

利用支援課 磯本 善男

はじめに - ドイツ・スタディーツアーについて -

このツアーはドイツ文化センター (Goethe-Institut) の主催で平成21年11月22日から29日にかけて行われました。国内の大学・研究機関の図書館職員を中心として12名が参加し、ドイツ国立図書館 (フランクフルト)、ゲッチンゲン大学図書館 (ゲッチンゲン)、技術情報図書館 (ハノーバー)、バイエルン州立図書館 (ミュンヘン)、マックス・プランク・デジタル図書館 (ミュンヘン) を訪問しました。

このツアーの目的は資料や情報の電子化、オープンアクセス (OA)、情報インフラの整備についてのドイツの事例を学び、また日本の事例について紹介して意見交換を行う、というものです。5つの大学にそれぞれほぼ1日滞在し、5日間で50を超えるセッションが行われましたが、どれも非常に密度の高いものでした。

私は日本の事例として、2日目のゲッチンゲン大学図書館で、北大の機関リポジトリ「HUSCAP」、DRF (デジタルリポジトリ連合) のサブプロジェクトである「AIRway」、 「ZS Project」を紹介してきました。

1日目. 11月23日 - ドイツ国立図書館 (Die Deutsche Nationalbibliothek: DNB)

ドイツ国立図書館は1912年、ライプチヒに創設されたドイチェ・ビュッヘライを礎とし、様々な歴史を経て、2006年にライプチヒのドイチェ・ビュッヘライ (DBL)、フランクフルト・アム・マインのドイチェ・ビブリオテーク (DBF)、ベルリンのドイツ音楽資料館 (DMA) から構成される現在の形になりました。

ここでのセッションは、FP7 (EUの第7次研究枠組み計画) に基づくデジタル情報の保存計画「PARSE. Insight」、ドイツ国立図書館、ゲッチンゲン大学



フランクフルト アム マイン (マイン川沿いのフランクフルト) のドイツ国立図書館。ここからツアーのスタートです。

図書館、IBM社協同のデジタル情報長期保存プロジェクト「kopal」、BMW (ドイツ連邦経済技術省) の研究プロジェクトである「THESEUS」の一環で、音声・映像データ等も含めたマルチメディアの保存・公開のプロジェクト「CONTENTUS」、ヨーロッパの書籍、音声、映画、写真、絵画等の文化財ポータルサイト「EUROPEANA」等について行われました。

2 日目. 11月24日 - ゲッチンゲン大学図書館

(Niedersächsische Staats- und Universitätsbibliothek Göttingen: SUB)

ゲッチンゲン大学は大学図書館とその所在地であるニーダーザクセン州の州立図書館としての機能も兼ね備えています。

この図書館の現館長は「COAR」(OA支援のための国際連携組織)の議長も務めておられるロツウ博士で、今回のセッションに加わっていただく予定でしたが、当日は所用のため残念ながらお会いすることはできませんでした。

ここでのセッションは、私の報告の他、ゲッチンゲン大学での科学技術情報の電子化の取組、ヨーロッパの人文科学分野の学術書のOA化推進コンソーシアム「OAPEN」、機関リポジトリと出版界の共生の可能性を探る「PEER」、EU内の機関リポジトリの連携強化を目的とする「OpenAIRE」、そして欧州のリポジトリ構想基盤「DRIVER」等について行われました。

3 日目. 11月25日 - 技術情報図書館 (Technische Informationsbibliothek: TIB)

ハノーバーにある技術情報図書館はその名の通り科学技術分野の専門図書館で、経済学中央図書館: ZBW, 医学中央図書館: ZBMEDと並ぶドイツの3つの専門図書館の1つです。

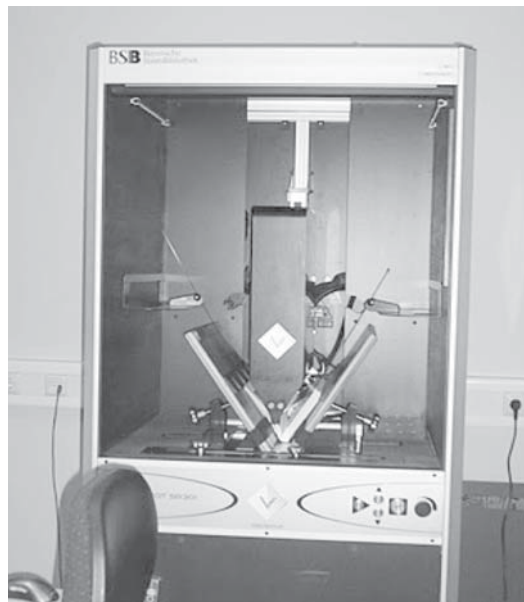
ここでのセッションは高エネルギー物理分野の学術雑誌のOA化を目指す「SCOAP3」、医学分野のOAポータル「GMS」、3つの専門図書館協同の学術情報ポータル「GoPORTIS」、科学技術データの保存・公開に関する取組「DataCite」、そして「vascoda」、「GetInfo」といった学術情報へのポータルについて行われました。

4 日目. 11月26日 - バイエルン州立図書館 (Bayerische Staatsbibliothek: BSB)

バイエルン州の首都ミュンヘンに位置するこの図書館はドイツでも有数の蔵書を誇ります。中にはミュンヘンデジタル化センター(MDZ)があり、ここで古典籍などの電子化が行われています。高性能のブックスキャナを使用し、自動的にスキャンされていきますが、確認作業はスタッフが行います。

右の写真はブックスキャナの1つの例ですが、図書をV字の台に固定し、風圧でスキャンするページをめくり、そのページの両面からスキャンをかけます。

ここでのセッションは、このセンターの紹介の他、電子メディアコンソーシアムの「ZEM」や電子ジャーナルポータルの「EZB」、各種のデータベースへのナビゲートを行う「DBIS」等について行われました。



バイエルン州立図書館のデジタル化センターで使用されているブックスキャナ「ScanRobot」

5 日目. 11月27日 - マックス・プランク・デジタル図書館 (Max-Planck-Digital Library: MPDL)

この図書館は、3分野・78の研究機関からなる非営利団体マックス・プランク協会の各機関の図書室を束ねる中央図書館的性質を持っています。

ここでは、購読する電子ジャーナルを選定する際の詳細な手法を紹介されました。パッケージ毎の単価や利用率等を詳細に分析したグラフ等を提示されましたが、購読料の高騰が顕著な現在ではとても興味深いものでした。そしてマックス・プランク協会とカールスルーエ情報センター (FIZ Karlsruhe) が協同で開発した科学技術情報プラットフォームである「eSciDoc」とそれにまつわる多くのプロジェクトが紹介されました。この「eSciDoc」は日本語のインターフェースもあり、実際にテストサーバでのデータの登録作業も見せていただきました。

ツアーを終えて

今回のツアーで、欧州の資料電子化に関する様々なプロジェクトに触れることができました。ここでは紹介できない程多くのプロジェクトがあり、その形態や出資者は様々ですが、それらのプロジェクト共通の理念は、情報の永続的保存 (long-term preservation) です。古典籍から最新の科学技術データにいたるまで、ありとあらゆる情報を「文化遺産」として「永続的に」「利用できる形」で保存することを目的としているのです。情報をただ保存するだけでなく、未来まで見据えて多くの利用者が利用可能な状態にしようとする姿勢は素晴らしいものだと思います。



ミュンヘンのホテルにてツアー最終日の記念撮影。
参加者の笑顔がこのツアーの素晴らしさを物語っています。

最後に、準備の段階からツアーが終わるまであらゆる面で私たち参加者をサポートしていただいたドイツ文化センター図書館長のクリステル・マーンケ氏、このツアーの準備や報告会にご尽力いただいた同図書館司書の吉次基宣氏、現地で合流しドイツを案内していただいた日独協会フランクフルト副会長のシュテファン・ツァイデニッツ氏、そしてこのような貴重な機会を与えていただいたドイツ文化センター、私を快く送り出していただいた附属図書館の皆様から心から感謝を申し上げます。

参考文献:

酒井由紀子, クリステル・マーンケ編. ドイツにおける学術情報流通 : 分散とネットワーク. 日本図書館協会, 259p.

英国及び中国の大学間協定校を訪問して

管理課 菊池 満史
管理課 長嶋 岳生

1. はじめに

平成21年11月16日から20日にかけて、シェフィールド大学、レスター大学、ウォリック大学、北京大学を訪問しました。これは、平成21年度海外協定校交流事業の助成の下で実施したものです。訪問の目的は、英国では各大学図書館の取組みを視察すること、北京大学図書館では本図書館との間で取り交わしている相互協力に関する覚書について今後の方針等を確認することです。

2. シェフィールド大学 (The University of Sheffield)

ここでは、インフォメーション・コモنز(Information Commons)を訪問しました。この施設は図書館とは別に図書館部門と情報基盤部門が共同で企画・運営しており、2007年にオープンしています。1階に図書館職員によるインフォメーション・デスク、2階に情報基盤部門職員によるインフォメーション・デスクがあります。職員のサービス時間は平日9-21時、休日9-17時ですが、建物自体に休館日はなく24時間開館しています。職員がいない時間も含めて警備員が常駐しています。



インフォメーション・コモنز外観

建物の総面積は約11,500㎡、座席数は約1,350席、ネットワーク端末数は約620台です。個人学習用デスクの約70%にパソコンが備え付けられているということです。また、所蔵している資料は、同大学図書館全体の約6%にあたる約11万冊です。

学生数や、施設としての位置付けに違いがあるので単純な比較はできませんが、附属図書館本館の総延床面積は17,342㎡、座席数は637席、ネットワーク端末数は約30台、蔵書冊数は約160万冊(平成21年3月31日現在)であることと比べると、インフォメーション・コモنزはより数多くの学習空間を有していることがわかります。また、それだけではなく、ここでは計画時点から利用者の学習空間の類型化を行い、次のような多様な学習空間を実現しているとのことでした。

学習空間	設備等
一般的スペース (Mixed Study Space)	パソコン使用を想定した個人用デスク
	パソコン使用を想定しない個人用デスク
	グループ学習用テーブル
静かな閲覧スペース (Silent Study Space)	パソコン使用を想定した個人用デスク*
	パソコン使用を想定しない個人用デスク
グループ学習室	半個室（ほかの閲覧スペースとガラスで区切られている）
	個室
フリースペース (Flexispace)	多様な情報機器, パーテーション
教室	各席に備付パソコン
カフェスペース	使用できる機能を限定したネットワーク端末

* オープン当初は用意していなかったが、利用者からの要望により設置

またそれぞれの個人用デスクは、パソコンや教科書・ノート等を同時に置いても十分なように、一人当たり4.0-4.2㎡のスペースを確保するようにしているとのことでした。

このほか印象に残ったことは、学習空間ごとに音響を遮断することで静粛性を保つことや、照度の目安を設けて、十分な明るさを確保することなどでした。この後訪れるところもそうですが冬季は日照が少ないためか、採光に関してはことに配慮していることが窺えました。

図書館が運営に参加しているとは言え、

ここでの取り組みがそのまま我々にも参考にできるとは限りませんが、図書館の一つの在り方、方向性という点では示唆に富むものと思います。



左から、長嶋、ルイスさん、ゴダールさん、菊池

3. レスター大学 (The University of Leicester)

当初ここを訪問する予定はありませんでしたが、シェフィールド大学のDirector of Library ServicesであるMartin Lewis氏の紹介で訪問することとなりました。レスター大学のデビッド・ウィルソン・ライブラリー(David Wilson Library)は2008年に増改築が完了しているということと、インフォメーション・commonsと異なり、いわゆる図書館らしい図書館ということで、我々の参考になるかもしれないのご配慮からでした。

ここの特徴は、一つの建物の中に複数の部門が同居し、まとめて学生サービスを行っていることだと思います。

1 階にはヘルプ・ゾーンと呼ばれるレファレンスを受付けるスペースがありますが、ここに図書館の職員と情報基盤部門の職員とがいて、両者の垣根なく質問を受け付けています。なお図書館の職員は青のシャツ、情報基盤部門の職員は紫のシャツを着て、区別できるようにはなっています。このヘルプ・ゾーンでは比較的簡単なレファレンスに対応し、より複雑で高度なレファレンスは別にスペースをもうけているということです。さらに、館内には大学のキャリア・サービス部門もあり、学生に対するキャリア支援サービスを行っています。

またシェフィールド大学同様、サイレント・スタディ・スペースとして、ほかの空間と仕切られたところがあります。このスペースは、同図書館の座席数の約 3 分の 1 (約400席)を占めます。このように全館を静粛に保とうとするのではなく、通常の部分とは別に静粛性を確保するスペースを作るという割り切りも一つの方針でしょう。

また、今回の訪問先に共通する特徴として、フロアやスペースごとに、インテリアや案内図が色分けされていて分かりやすかったことがあげられます。

4. ウォリック大学 (The University of Warwick)

ウォリック大学では、予約制のオープン・キャンパス・デイに申込みをし、普段学外者は入館できないラーニング・グリッド(Learning Grid)やティーチング・グリッド(Teaching Grid)等を訪問しました。

ラーニング・グリッドは、大学本部棟であるユニバーシティ・ハウスの中にあります。

ここは、ウォリック大学の図書館、情報基盤部門、キャリア・サービス部門、学生ユニオン、学生や院生の学習支援を担当する部門(Skills Development)、大学構成員の能力開発を担当する部門(Learning & Development Centre)が共同で計画し、2004年にオープンしています。

開館時間は24時間で休館日はありません。総面積は約1,350㎡、座席数は約300席、ネットワーク端末数は約70台です。所蔵している資料は約 1 万冊ですが、貸出はしていません。

大きな特徴は、学生アドバイザーの存在だと思います。彼らが日常の運営で大きな役割を担っています。いわゆるレファレンスデスクというものではなく、利用者と学生アドバイザーは同じ空間で活動しています。そのため利用者から見てわかるように、学生アドバイザーは青いシャツを着ています。彼らの活動内容は多岐にわたり、利用者の学習活動を幅広くサポートしています。

彼らは採用後、職員による20コマほどのトレーニングを受けます。しかし、現場では詳細なマニュアルが用意されているわけではなく、必要最小限のルールの下、自分の判断で活動しています。

彼らの一人と話をしましたが、自分の職務に対し、非常にプライドとやりがいをもって携わっているようでした。学生アドバイザーとしての自身の活動を、ラーニング・グリッドのサービス向上に還元できるように努めているとのことでした。

次に2008年に改修が完了したメイン・ライブラリーを訪問しました。総面積は約28,000㎡、座席数は約1,600席、ネットワーク端末数は約240台、所蔵している資料は約120万冊です。

今回訪問した他の大学図書館と同様に、多様な設備とサービスが適所に備えられている様子が窺えました。

館内にはウォルフソン・リサーチ・エクスチェンジ(Wolfson Research Exchange)という、学内の研究者や大学院生のための研究推進支援や、ワークショップのためのスペースがあります。ここでは言わば、「研究サロン」のような役割を果たしているという印象を受けました。ここには、ネットワーク端末やセミナールーム（3部屋）、休憩のための空間などが備えられています。

続いてティーチング・グリッドです。ここはメイン・ライブラリーの改修にあわせて2008年にオープンしています。教育に携わるスタッフのために、ブレインストーミングを行ったり、教育に関するワークショップを開催するほか、学内の最新の施設や情報機器を教育に取り入れるためのラボのような役割を担っています。

スペースはガラスや布製のパーテーションで構成され、様々な形態の椅子、机、ソファが設置されています。また、講義の受講者の意見をリアルタイムで集約できる「クリッカー」と呼ばれるカードサイズの小型端末や、「スマートボード」と呼ばれる電子黒板、ビデオ編集機能に特化したパソコン等先進的な情報機器があり、その種類の豊富さに目がくらみました。

今回ウォリック大学で訪れた施設は図書館とは異なるものですが、大学における利用者サービスの一つの姿として示唆に富むものでした。またラーニング・グリッドの学生スタッフの自立的な活動の様子に、深く印象づけられました。



ティーチング・グリッド内部

6. 北京大学

北京大学訪問の目的は、平成17年に本学図書館と北京大学図書館との間で締結した「相互交流及び協力に関する覚書」の第1項（刊行物の寄贈）について今後の方針などを確認することです（覚書の内容は、本文末を参照）。

当日は朱図書館長や図書館スタッフの方と、今後の寄贈図書の方針についての意見交換を行いました。日本語のできるスタッフの方がおり、打合せはスムーズに行われました。

北京大学図書館では日本語資料が少ないので、どのような分野でもほしいということでした。

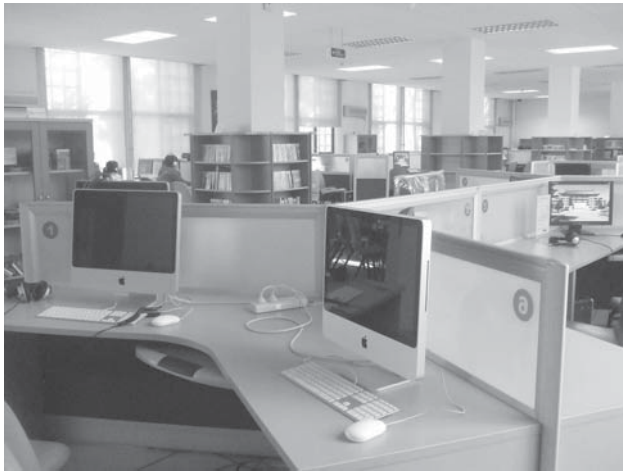
覚書締結後、具体的な方針等についてこれまで話し合う機会がありませんでした。北京大学を訪問し、覚書の内容について確認したことで、今後の両図書館の交流に弾みがつくものと思います。

打合せの後、館内を案内されました。6階建てで蔵書冊数は約700万冊という、アジア一大きいとされている図書館です。英国の大学もそうでしたが、北京大学も閲覧席やパソコン端末席は多くの学生に利用されていました。

また本館のCNN視聴スペースのように、ディスプレイと椅子を置いて映画やニュース映像を視聴できる場所や、視聴覚資料を利用できる部屋もあります。視聴覚資料は、映像データをサーバに蓄積し、

各機の端末に配信する仕組みになっているということでした。

これは最近の傾向なのかもしれませんが、図書館内に学生の勉学のスペースだけではなく、息抜き、休息のできるスペースを用意しているのが印象的でした。



AVルーム

7. おわりに

今回、英国での訪問先では、図書館と学内のさまざまな部門が垣根を越え、共同で活動を行っている様子が窺えました。また、利用者が自身の学習・研究の段階や目的ごとに選べるような、多様な空間が提供されていることを印象深く感じました。

今回の訪問を通して、研究・教育・学習が行われる「場所」としての図書館という視点から、大学図書館について見つめなおす機会をいただきました。これまでに積み上げてきた大学図書館の機能を根底に置きつつも、今

より良い形を模索する姿勢も大事だと改めて感じました。

最後になりましたが、お忙しい中大変親切な対応してくださった英国各大学及び北京大学の皆様、並びに快く送り出してくださった、附属図書館をはじめとする本学関係者の方々に、心より感謝申し上げます。

(参考)

日本国北海道大学附属図書館と中華人民共和国北京大学図書館との相互交流および協力に関する覚書

北海道大学附属図書館（以下「乙」という）と北京大学図書館（以下「甲」という）は、両大学がすでに締結した学术交流協定に基づき、両館の学术交流と学術資源の共同利用を促進するために、相互交流および協力に関する覚書を締結する。具体的な内容は以下の通りである。

1. 甲乙双方は、両大学の教員が出版した学術刊行物を、原則として一年に一度交換する。交換する刊行物については、相手側の意向を尊重する。

(以下略)

資料紹介**平成21年度特別図書購入費による購入資料（2）**

前号（133号）に引き続き、特別図書購入費で購入した図書を紹介します。

- Collier on Bankruptcy, 15th edition revised, 1996 to date
（コリアー米国破産法 第15版改訂版）Matthew Bender, 2001

本書は、アメリカ倒産法を逐条的に解説した大系書で、実務及び理論上のすべての問題を取り扱ったその網羅性と、常にその時代の倒産法分野の第一人者を執筆陣に迎えたその法律分析の質の高さから、1898年の初版刊行以来100年にわたり実務家・研究者双方から高い評価を得てきており、米国の連邦及び州の最高裁・破産裁判所・下級裁判所の判決文や研究論文に最も引用されている文献である。

また現行法及び1898年法以降の旧法、関連諸法令の条文はもとよりLegislative History等の立法資料や実務に欠かせない関連資料なども豊富に収録しており、2005年大改正に対応した大幅な改訂・加筆がなされている。

- Recueil des Decisions des Tribunaux Arbitraux Mistes. Tome I-X. 1922-1930.
(10 vols set) (混合仲裁裁判所判例集) W. S. Hein, 2006

混合仲裁裁判所は第一次大戦後の戦後処理のために設置された裁判所であり、戦争に伴う個人被害者からの国家に対する請求を取り扱った。

個人が直接国家を相手取って訴えることができるという点で、今日の国際人権裁判所や国際投資仲裁の貴重な先例である。また戦後処理という観点では、イラク戦争以降の多くの戦争でも重要な先例として役立ってきているものである。

(管理課)

教員著作寄贈図書

(平成21年10月1日～平成22年1月31日)

寄贈者 (敬称略)	所属部局	寄贈図書	所在
大原 昌宏	総合博物館	パラタクソノミスト養成講座 / 大原昌宏, 澤田義弘著 ; 田中眞理, 澤田義弘, 大原昌宏図 ; 昆虫(初級)採集・標本作製編. - 札幌 : 北海道大学総合博物館, 2009. 3. - (パラタクソノミスト養成講座・ガイドブックシリーズ ; 1)	本館・開架・教員著作
			北図書館・開架・一般図書
小林 孝人 高橋 英樹	総合博物館	きのこ / 小林孝人, 高橋英樹著 ; 小林孝人写真 ; 小林孝人, 大原昌宏図・イラスト ; 初級・中級: ハラタケ目編. - 札幌 : 北海道大学総合博物館, 2009. 8. - (パラタクソノミスト養成講座・ガイドブックシリーズ ; 2. パラタクソノミスト養成講座).	本館・開架・教員著作
			北図書館・開架・一般図書
千葉 芳広	元経済学研究科	フィリピン社会経済史 : 都市と農村の織り成す生活世界 / 千葉芳広著. - 札幌 : 北海道大学出版会, 2009. 9.	本館・開架・教員著作
			北図書館・開架・一般図書
坂口 一成	法学研究科	現代中国刑事裁判論 : 裁判をめぐる政治と法 / 坂口一成著. - 札幌 : 北海道大学出版会, 2009. 9.	本館・開架・教員著作
			北図書館・開架・一般図書
北村 清彦	文学研究科	自分を代表させるような仕事はまだありません。 : 村岸宏昭の世界 / 村岸宏昭作品集編集委員会編集. - 札幌 : かりん舎, 2009. 9.	本館・開架・教員著作
			北図書館・開架・一般図書
関 孝敏	文学研究科	家族と都市移住 / 関孝敏著. - 東京 : 古今書院, 2009. 10.	本館・開架・教員著作
加藤 重広	文学研究科	その言い方が人を怒らせる : ことばの危機管理術 / 加藤重広著. - 東京 : 筑摩書房, 2009. 11. - (ちくま新書 ; 812)	本館・開架・教員著作
			北図書館・開架・一般図書
加藤 重広	文学研究科	言語研究の射程 : 湯川恭敏先生記念論集 / 加藤重広, 吉田浩美編. - 東京 : ひつじ書房, 2006. 6.	本館・開架・教員著作
			北図書館・開架・一般図書
阿部 周一	水産科学研究院	サケ学入門 : 自然史・水産・文化 / 阿部周一編著. - 札幌 : 北海道大学出版会, 2009. 12.	本館・開架・教員著作
			北図書館・開架・一般図書
浅川昭一郎	名誉教授	ランドスケープの新しい波 : 明日の空間論を拓く / 現代ランドスケープ研究会編. - 東京 : メイプルプレス, 1999. 6.	本館・開架・教員著作
日置 真世	教育学研究院附属 子ども発達臨床 センター	日置真世のおいしい地域(まち) づくりのためのレシピ50 / 日置真世. - 全国コミュニティライフサポートセンター(CLC), 2009. 10.	本館・開架・教員著作
小内 透	教育学研究院	在日ブラジル人の労働と生活 / 小内透編著. - 東京 : 御茶の水書房, 2009. 12. - (講座トランスナショナルな移動と定住 : 定住化する在日ブラジル人と地域社会 ; 第1巻)	本館・開架・教員著作
小内 透	教育学研究院	在日ブラジル人の教育と保育の変容 / 小内透編著. - 東京 : 御茶の水書房, 2009. 12. - (講座トランスナショナルな移動と定住 : 定住化する在日ブラジル人と地域社会 ; 第2巻)	本館・開架・教員著作
小内 透	教育学研究院	ブラジルにおけるデカセギの影響 / 小内透編著. - 東京 : 御茶の水書房, 2009. 12. - (講座トランスナショナルな移動と定住 : 定住化する在日ブラジル人と地域社会 ; 第3巻)	本館・開架・教員著作

ご惠贈誠にありがとうございました。

附属図書館では本学教員が執筆した図書を収集しています。新たに本を出版される際には、是非ご惠贈くださるようご協力お願いいたします。また、北京大学図書館との相互交流および協力に関する覚書の締結に基づき、北京大学との交換用にもう1冊分、ご寄贈いただきますようご協力をお願いいたします。とりまとめは、附属図書館で行います。

学術成果コレクション(HUSCAP)収録文献

(平成21年10月1日～平成22年1月31日)

新たに、183名の研究者の方々からご提供いただいた404件の文献を公開しました。

また、12研究科等の20タイトルの紀要（文献2,362件）も公開しました。

HUSCAPについて詳しくは、下記URLをご覧ください。

<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/>

附属図書館では、本学の研究者が執筆した論文や学会発表資料等の文献を収集し、HUSCAPにて保存・公開しています。

新たに論文等を発表された際は、repo@lib.hokudai.ac.jpへファイルをお送りください。

ご協力よろしくお願いたします。



会議 (平成21年11月1日～平成22年2月12日)

【学 内】

- ◎学術研究コンテンツ小委員会
 - 平成21年度第2回〈1月19日(火)〉

- ◎図書選定小委員会
 - 平成21年度第2回〈11月27日(金)〉
 - 平成21年度第3回〈2月10日(水)〉

【学 外】

- ◎国立大学図書館協会
 - 総務委員会〈11月19日(木)〉(東京大学)
 - 秋季理事会〈11月30日(月)〉(名古屋大学)
 - 北海道地区協会事務部課室長会議〈12月11日(金)〉(北海道大学)
 - 臨時理事会〈2月8日(月)〉(東京大学)

- ◎北海道地区大学図書館協議会
 - 幹事館会議(北海道大学)
第1回〈10月20日(火)〉

- ◎北海道図書館連絡会
 - 北海道図書館連絡会議〈1月27日(水)〉(道立図書館)

人事往来 (平成21年11月1日～平成22年2月28日)

【平成21年11月30日付発令】

[退職]

東 重 俊 附属図書館利用支援課課長補佐

訃 報

附属図書館利用支援課付(工学研究科・情報科学研究科・工学部)廣中 恵子氏(享年58歳)には、病氣療養中のところ、平成22年2月6日、逝去されました。

ここに慎んで哀悼の意を表します。

同氏は、昭和47年4月工学部に採用され、工学研究科・工学部、工学研究科・情報科学研究科・工学部、附属図書館情報サービス課付(工学研究科・情報科学研究科・工学部)を経て平成21年4月附属図書館利用支援課付(工学研究科・情報科学研究科・工学部)に配置換となったが、この間一貫して図書業務に携わり、37年10月にわたって、本学のため献身的に職務に精励されました。

図書館情報入門・セミナー等開講日誌（平成21年10月1日～平成22年2月10日）

図書館情報入門（計11回）

日 程	曜日	講義題目（時間 90分）	所 属	担当教員	受講人数
10月15日	木	精神障害者と社会	教育学研究院	葛西 康子	18
10月15日	木	女性と健康	医学部（保健学科）	佐川 正	18
10月22日	木	生殖医学（女性医学）概論	医学研究科	水上 尚典	8
10月22日	木	身近な薬草・毒草	薬学研究院	久保田高明	16
10月28日	水	計算機シミュレーション入門	理学研究院	坂上 貴之	8
11月4日	水	パッチアダムス研究 - 現代医療が失ったもの -	医学研究科	前沢 政次	20
11月5日	木	暮らしの中の放射線	獣医学研究科	稲波 修	13
11月12日	木	建築と都市	工学研究科	小澤 丈夫	19
11月13日	金	素晴らしい無線通信の世界	情報科学研究科	小川 恭孝	18
11月19日	木	聞く力・話す力のトレーニング	高等教育機能開発総合センター	三上 直之	22
12月3日	木	「男」か「女」かということ - これからの生き方・働き方 -	留学生センター	高橋 彩	12

受講人数計 172

文献探索ワークショップ（計5回）

日 程	曜日	講義題目	所 属	担当教員	受講人数
10月9日	金	スポーツと現代社会	教育学研究院	大沼 義彦	6
10月21日	水	Field Bioscience in the Northern Biosphere	北方生物圏フィールド科学センター	上田 宏	14
11月11日	水	教育心理学実験（ストループ効果）	教育学研究院	河西 哲子	20
11月12日	木	比較文化論	留学生センター	青木麻衣子	13
11月30日	月	日本経済史	経済学研究科	内藤 隆夫	7

受講人数計 60

ライブラリーセミナー（計8回）

日 程	曜日	題目（時間 60分）	受講人数
12月16日	水	新聞記事の探し方	4
12月17日	木	新聞記事の探し方	2
1月19日	火	雑誌論文の探し方（国内雑誌編）	7
1月21日	木	雑誌論文の探し方（科学技術編）	2
1月25日	月	雑誌論文の探し方（科学技術編）	4
1月27日	水	雑誌論文の探し方（国内雑誌編）	5
2月4日	木	PubMed/MEDLINEの使い方	2
2月10日	水	電子ジャーナルの使い方	7

受講人数計 33

データベース講習会 (計22回)

日程	曜日	題 目	開講場所	受講人数
10月13日	火	Web of Science講習会	農学部	22
10月13日	火	Web of Science講習会	医学部	13
10月14日	水	Web of Science講習会	附属図書館	9
11月17日	火	SciFinder講習会	工学部	7
11月17日	火	SciFinder講習会	工学部	15
11月18日	水	SciFinder講習会	附属図書館	2
11月18日	水	SciFinder講習会	農学部	7
11月19日	木	SciFinder講習会	理学部	2
11月20日	金	SciFinder講習会	水産学部	9
11月20日	金	SciFinder講習会	水産学部	8
11月26日	木	Reaxys講習会	理学部	7
11月26日	木	Reaxys講習会	附属図書館	3
11月27日	金	Reaxys講習会	工学部	9
11月27日	金	Reaxys講習会	工学部	31
11月27日	金	Reaxys講習会	農学部	8
12月 2日	水	GVRL利用説明会	附属図書館	2
12月 2日	水	GVRL利用説明会	附属図書館	2
12月 7日	月	Ovid講習会	附属図書館	2
12月 7日	月	Ovid講習会	医学部	4
12月 8日	火	Ovid講習会	附属図書館	3
12月 8日	火	Ovid講習会	獣医学部	12
12月 9日	水	Ovid講習会	理学部	3

受講人数計 180

図書館日誌 (平成21年10月17日～平成22年2月12日)

月日	項 目	月日	項 目
10月		4	来館 (文部科学省専門官他 2名)
18-25	機関リポジトリの国際連携に係る出張 (ベルギー他) (学術システム課)	7	共用パソコン不正利用防止策についての説明会 (学術システム課)
20	第1回北海道地区大学図書館協議会幹事館会議 (利用支援課長, 利用支援課)	11	国立大学図書館協会北海道地区協会事務部課室長会議 (部長, 管理課長, 利用支援課長, 学術システム課長)
21	平成21年度第5回ホームページ委員会 図書館年鑑2010第1回北海道ブロック会議 (北海道立図書館) (利用支援課長)		北海道地区私立大学図書館協議会2009年度研究集会 (北海学園大学) (管理課, 学術システム課)
22-23	事務情報化講習会ACCESS初級 (管理課, 利用支援課, 学術システム課)	15	国立大学図書館協会シンポジウム (一橋大学) (利用支援課)
22	事務局意見交換会 (管理課, 利用支援課, 学術システム課)		ライブラリ・コネクト・ワークショップ2009 (利用支援課)
23	第83次国立7大学附属図書館協議会及び第8回国立7大学附属図書館長会議並びに第42回国立7大学附属図書館事務部課長会議 (東北大学) (館長, 部長, 管理課長)	16	平成21年度第6回ホームページ委員会
	日本医学図書館協会北海道地区加盟館研修会 (旭川) (利用支援課)	21-2/28	耐震改修工事のため17時閉館 (本館)
	平成21年度GIFプロジェクトWGキックオフミーティング (NII) (利用支援課)	21-22	AIRwayプロジェクト出張 (九州大学, 久留米大学) (学術システム課)
	ドイツ文化センター出張 (東京) (利用支援課)	24	国立大学図書館協会学術機関リポジトリWG (名古屋大学) (学術システム課長)
	消防訓練 (北図書館)	1月	
26-11/13	「本は脳を育てる」企画展示 (北図書館)	6-7	国立情報学研究所図書館連携作業部会WG1 (NII) (学術システム課)
27-29	平成21年度北海道地区国立大学法人等係長研修 (学術システム課)	7-8	DRF仙台 (東北大) (学術システム課)
28	自衛消防訓練 (本館)	12	出向者交流会
29	NAIST電子図書館学講座 (奈良先端科学技術大学院大学) (利用支援課)	15	図書館年鑑2010第2回北海道ブロック会議
	学術認証フェデレーション及びSINETサービス説明会 (管理課, 学術支援課)	19	平成21年度第2回学術研究コンテンツ小委員会
30	画像保存セミナー (東京) (利用支援課)	20	平成21年度第3回榆蔭編集委員会
11月		20	平成21年度第7回ホームページ委員会
4	北方資料室見学 (札幌大学学生 20名)	20-22	平成21年度日本古典籍講習会 (国文学研究資料館) (学術システム課)
10-12	図書館総合展 (横浜) (管理課, 利用支援課)	20-22	事務情報化講習会 (ACCESS中級) (学術システム課)
	第5回DRFワークショップ (横浜) (学術システム課)	20-22	事務情報化講習会 (ACCESS中級) (学術システム課)
10-13	第29回西洋社会科学古典資料講習会 (一橋大学) (学術システム課)	25	AED講習会
15	北図書館停電 (開館時間変更)	27	来館 (韓国慶北大学校法科大学訪問団 7名)
15-21	海外協定校交流事業出張 (英国, 中国) (管理課)		北海道図書館連絡会議 (北海道立図書館) (利用支援課長)
18	来館 (外務省外交史料館事務官 1名)		来館 (文部科学省室長 1名)
19	国立大学図書館協会総務委員会 (東京大学) (部長)	2月	
20	国立大学図書館協会シンポジウム (神戸) (利用支援課)	2	来館 (韓国江原大学訪問団 7名)
22-29	ゲーティンスティテュートドイツ研修ツアー (ドイツ) (利用支援課)		日本医学図書館協会北海道地区会総会 (札幌医科大学) (利用支援課長, 利用支援課)
27	平成21年度第2回図書選定小委員会	3	電子リソースサービスグループ打合せ (管理課, 利用支援課, 学術システム課)
30	国立大学図書館協会秋季理事会 (名古屋大学) (館長, 部長, 管理課長)		自動化書庫仕様策定委員会
12月		4-5	国立大学図書館協会北海道地区セミナー
2-4	NACIS-CAT/ILLワークショップ (NII) (学術システム課)	5	第6回DRFワークショップ
3-4	DRFIC2009 (東京工業大学) (管理課, 利用支援課, 学術システム課)		ドイツスタディツアー報告会 (東京) (利用支援課)
		8	国立大学図書館協会臨時理事会 (東京大学) (部長, 管理課長)
		9	国立情報学研究所目録システム講習会担当者会議 (学術システム課)
		10	平成21年度第3回図書選定小委員会

北海道大学附属図書館報「楡蔭」(ゆいん) 第134号 平成22年3月19日発行

〈編集〉 「楡蔭」編集委員会

〈発行〉 北海道大学附属図書館 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目
TEL : 011-706-2967 FAX : 011-747-2855 ホームページ <http://www.lib.hokudai.ac.jp>